



Title	北大の分類学と生物標本
Author(s)	持田, 誠
Citation	きぼうの虹, 324, 7-7
Issue Date	2009-09-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39218
Type	column
Note	総合博物館へ行こう. 第2回.
File Information	mochida-6.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学総合博物館には、大学内のさまざまな標本や資料が集まってくる。それらは分類学の研究に用いられる植物標本や、考古学研究に用いられる土器片など、大学での研究活動に用いられた資料である場合もあるし、北大の歴史を語る写真や文書、技術史を辿る資料となる分析機械など、博物館に收藏されることで、これから研究資料となるようなものもあり、実にさまざまである。

そのような多様な資料があるなか、この夏、総合博物館では開館十周年記念企画展示「生物多様な部屋 北大の分類学の系譜」を開催している。ここでは、分類学という視点から、総合博物館に收藏されている生物標本の一端が公開されている。そこで今回は、北大と分類学との関わりや、生物標本について紹介する。

分類学と標本

地球上の生物に名前を付け、互いの系統関係や形態の多様性などを明らかにする学問を分類学と言う。大きく分けて動物分類学と植物分類学があり、国際的に定められた「命名規約」に基づいて、新種の生物に名前を与え、決まった形式で論文を発表する。その際、名前を付けた新種の生物の根拠となる標本を「タイプ標本」と言う。

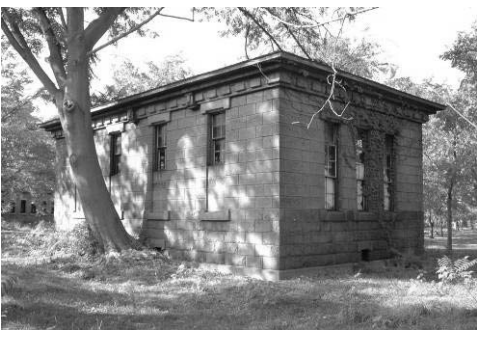
タイプ標本は世界でひとつしか無い、その生物の基準となる標本だ。そのため、数ある標本の中でも別格に大切に保存される。しかし、タイプ標本以外の標本も、その生物、そして関連する生物の多様性を理解する上でとても大切なものであり、それらの標本を守り次世代へ継承していくことが、博物館最大の使命だ。

総合博物館へ 行こう

第2回

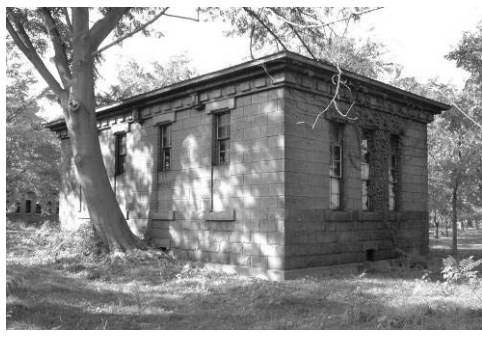
北大の分類学と生物標本

総合博物館
研究支援推進員 持田 誠



今もローンに残る旧昆虫標本庫。1927(昭和2)年建造なので総合博物館よりも2年古い。

農学校を象徴するウィリアム・スミス・クラークは、アメリカのマサチューセッツ農科大学で園芸学・植物学を講じていた。そのクラークの影響を受けて、農学校には多数の植物標本が集積されると共に、植物園までが設置された。今日で言うところの植物多様性研究の先鞭はこうしてつけられ、以来、宮部金吾、工藤祐舜、伊藤誠



今もローンに残る旧昆虫標本庫。1927(昭和2)年建造なので総合博物館よりも2年古い。

残されている。北大交流プラザ「エルムの森」となった緑色の屋根の建物が、かつての昆虫学教室であることは有名だが、実はその裏手に立つ石造建築物が昆虫標本庫であったことを知る人は少ない。万一の火災などから貴重な標本を守るために、標本庫を石造建築とすることを強く進言したが、「我が国における近代昆虫学の開祖」と呼ばれる松村松年である。彼は一九〇七年に札幌農学校の昆虫学教室主任となったが、それはそのまま我が国最初の昆虫学教室の創設であった。昆虫分類学と応用昆虫学の一大研究拠点となつた北海道大学は、今日も多数の分類学者を輩出すると共に、膨大な昆虫標本コレクションの構築を続けている。

総合博物館には、函館キャンパスに水産科学館という分館がある。函館キャンパスには水産学部魚類体系学教室があり、魚類の分類学研究に伴い多数の標本を集集。以来、これらの標本を集積してきた旧水産資料館が、今日総合博物館の分館として、水産学部と手を携えながら新たな歴史を刻んでいる。札幌では目にするこのできない魚類の多様性が標本で展示されているので、水産学部へお出かけの際にはぜひ立ち寄って頂きたい。

分類学を継承する若者たち

よく間違われるが、標本は研究が終わった後の使い古しではない。これらの標本は機会あるごとに新たな研究材料として活躍する現役の学術資源である。その証拠に、現在も分類学を学んでいる若手大学院生が多数北大で活躍し、地球上の生物多様性を明らかにするために日々研鑽を続けている。

総合博物館では九月二十五(二十七日)の三日間、現役の大学院生によるポスター発表会「分類学を継承する若者たち」を開催する。新進気鋭の大学院生たちが、自らの分類学をポスター形式でわかりやすく解説する。場所は総合博物館一階の統合コーナーで。入退場自由、無料。ぜひ足を運んでいただき、企画展示とともに北大の分類学を感じ取っていただきたい。

北大は分類学のメッカ

北大は分類学のメッカだ。札幌

標本には、乾燥標本や液浸標本など、生物の種類や状態によって、さまざまな形態がある。「生物多様な部屋」展では、北大の研究者が収集してきた多様な生物群について、その標本を一堂に集めて紹介している。

哉、館脇操、山田幸男ら北方植物分類学の多才な指導者を輩出した北海道大学は、北の植物研究の一大拠点と発展し、現在に至っている。その軌跡は、現在総合博物館に集約されている無数の植物標本に見ることが出来る。

かつて東洋一と呼ばれた石造りの昆虫標本庫が、現在も総合博物館に隣接するローンにひっそりと